

平成28年6月1日、政策秘書課職員に話をした内容です。

## まちづくりは引き継がれていく

私たちが暮らす長久手の生活用水や農業用水の多くは、水源地である長野県木曾郡の（牧尾）ダムから木曾川、そして愛知用水を通して、はるばる運ばれてきています。この「愛知用水」の誕生には、役所主導ではなく、二人の市民が大きく関わっていることをみなさんにご存知でしょうか。

その二人とは、知多郡八幡村（現在の知多市）の久野庄太郎氏と、愛知郡豊明村（現在の豊明市）出身で農学校の先生をしていた浜島辰雄氏です。

長久手市を含む尾張東部地区から知多半島にかけては、大きな河川がなく、愛知用水ができる前は、生活用水は井戸水で、農業用水はため池や川の水でまかなっている状況でした。そんな中、久野氏と浜島氏は、戦後間もない頃、資金や技術もなく、現実には不可能に思われていたにも関わらず、「水に困っている地域の人のために」という強い信念のもと、愛知用水の必要性を説いて回り、私財を投げ打って調査をし、その熱意で国をも動かしました。そして、ついに昭和36年、愛知用水は完成しました。

残念ながら、久野氏も浜島氏も既に亡くなっていますが、先日、私は、お二人と一緒に仕事をされたという東郷町にお住まいの93歳の方と話をする機会がありました。その方は、私に「何でも行政任せではいけない。市民には、まちを作っていく力がある。長久手市が進めている市民主体のまちづくりについて勉強させてほしい」とおっしゃいました。93歳にして「まちづくりの勉強をしたい」という熱意には驚きましたが、久野氏と浜島氏の働きぶりを間近に見て、一緒に取り組んでいた方だからこそ、「市民には力がある」という言葉には重みがありました。

今、いろいろな場面で市民のみなさんが主体となり、新しい長久手をつくろうとしています。先日も、地域のまちづくりに携わる3人が、それぞれのまちづくりにかける思いを私に話してくださいました。今までだったら、役所が主導して「こうしましょう」と決めてしまい、それぞれの熱い思いを聞く場面もなかったかもしれません。

市民のみなさんが、「こんなまちにしたい」という熱意を持ち、互いにその思いを語り合い、議論をしてまちをつくっていくことができれば、この長久手は絶対に良くなります。今、長久手は一步ずつ前に進んでいると感じています。

～市長の話を聞いて～

最近、よく市長から「こうしたい、こうなりたいという思いがあるかが大切」と言われます。生き方でも仕事でも、胸を張れる「思い」があるか自問自答しています。

市民3人の方の話を市長と一緒に伺いましたが、いずれの方からも、「自分が住んでいる地域をより良くしたい」という強い思いが伝わってきました。こうしたみなさんの姿は、私たち40代がリタイアした後の良い手本になるだろうと、大変有難く思いながら、話を伺いました。